

熊薬同窓会報

第 35 号

平成 12 年 11 月 30 日
発行

年寄りの寝言

同窓会副会長
瀬戸 和善(昭和17年卒)



今年の 8 月 15 日、55 回目の終戦を迎えました。私が熊本薬専を卒業したのが昭和 17 年 9 月 25 日ですので、あと 1 カ月で満 58 年になります。

約 60 年の間、社会の変化は雲泥の差があります。時代の違いをしみじみと感じます。薬剤師の社会も同じです。この間私は熊本薬専の卒業だという誇りと学校名を傷つけないように心がけ自分の能力に応じ誠実をモットーに努力してきましたつもりです。昔の薬剤師の過

ごしてきた寝言(つぶやき)です。

藤田校長先生の思い出ば「地方で発病する病気を治す薬はその地方にある」と言われたこと、「山紫水明を科学的に説明せよ」という試験問題です。

10 月 1 日現役として入隊。衛生部幹部候補生に合格し、東京の軍医学校の 3 カ月の教育を受け薬剤官見習士官として赴任したのが牡丹江陸軍病院(昭和 19 年 3 月)です。薬剤師として仕事ができると張り切っていたのに、薬室勤務で事務屋、倉庫の薬品、衛生材料の管理でソロバンを使って帳簿の整理、時々体温計の検査、サルファ剤の時代でドイツの潜水艦でもってきたという試験管の青黴を見せられてこれがペニシリンの原料だと言われた時代です。

8 月、ソ連軍が侵攻し病院も撤退することになり、私が最後に病院にガソリンをまいて火を付けて退去するよう命じられました。3 カ所にガソリンを撒いて火を付けたのですが風向きのためか、火のつけかたが悪かったのか一部分が焼けただけでした(敗

戦後またその病院で仕事をするようになりました)。

横道河子分院まで撤退、ソ連軍により武装解除、終戦、横道河子分院より、拉古、謝家溝と捕虜収容所病院を移動、移動毎に医薬品、衛生材料は勿論ロストルを大事に運搬します。なぜロストルか? 移動したら直ちに蒸留水の製造です。その為にロストルを大事にしたのです。リングル、生理食塩水、転化糖の注射薬を製造するのに蒸留水が必要だからです。電気、ガスのない時代です。転化糖を作るには 36 度で 24 時間保温せねばならず孵卵器がないので不寝番です。電気、ガスの貴重さが身にしみず。薬品の補充はなく、薬剤師の力を示す時代でした。あるときソ連軍の将校から呼び出され車に乗せられ、牡丹江に連れて行かれました。倉庫に日本製の薬品が収集されていて、私に薬を見せながら《ナダ、ニナダ》と言います。何のことが判りませんでした。ナダと言った時にうなずくと私に渡しニナダの時にうなずくと別にします。必要か、必要でないかの意味が判ってからは、殆どニダ、ニダで薬品を補給することができました。これが私のロシア語との出会いの最初です。

拉古収容所時代多くの日本軍がダバイ、ダバイとソ連へ移動しました。私達の病院も半分近くソ連へ移動しました。我々は帰国が遅くなると思っていたら夕方にはソ連から病人が移ってきましたので同じように忙しくなりました。拉古から謝家溝へ病院が移動、謝家溝で発疹チフスが流行、リングル、転化糖の注射薬の製造に追われる毎日でした。ソ連軍が撤退して東北人民解放軍(八路军)に引き継がれました。謝家溝は旧牡丹江陸軍病院の隣で、旧陸軍病院は解放軍の病院が開設されていました。私がガソリンを撒き火をつけて撤退した病院です。解放軍の病院へ行けば、医師、薬剤師は白米を食べることができました(他の人は高粱米等)ある理由で私は行かず後勤部へ残り牡丹江の街に移動しました。後勤部は労働が主で雑役が仕事です。我々の直属の責任者(中国

目次

年寄りの寝言	1	薬学展報告	11
研究室だより(薬理学研究室)	2	第 43 回九薬連総合大会の結果	11
支部だより	3	寄付者一覧	11
福岡支部・蘇陵会	宮崎県支部	1-10 千人会入会者一覧	12
関西地区	北九州支部・玄楠会	この友をさがせ	14
関東支部・東京バッテン会	佐世保支部	会計報告	16
卒業生だより	7	公開シンポジウム開催	17
熊薬、昔は今(14)	8	小島政夫先生を悼む	18
博士号取得者	9	連絡先	18
慶事	9	編集後記	18
訃報	9	熊薬研究助成会規則	19
庶務報告	10	熊薬研究助成支援の会について	20
学内だより	10	平成 13 年度研究助成の申請について	20
平成 12 年度卒後教育ビデオの貸し出しおよびテキスト頒布について	10		

人)が入院しましたので解放軍の病院へ見舞いに行き、その帰りに道で解放軍の病院長(王院長)に会いましたところ、院長から「どこに居るか尋ねられ、後勤部に居ると答えたところ、翌朝、鉄砲を持った兵士が二人来て解放軍の病院へ連行されました。王院長は謝家溝に居るとき薬剤部に見学によく来ていたのでよく知っていました。また病院勤務となり、薬剤師の仕事をするようになりました。薬は補給がないので少なくなるばかりです。カルモチンが少なくなったので医師と私だけの約束でカルモチンとよく結晶が似た次亜燐酸カルシウムをカルモチンの代わりに服用するようにし、それが効かない時だけカルモチンを服用するようにしたところ、次亜燐酸カルシウムが大変効いたのには驚きました。帰国後プラセボ効果のことを聞き成程と思いました(我々の時代は習っていませんでした)。また官舎は配電盤に大理石を使っていたので大理石を取ってきて塩化カルシウムの注射薬の製造、阿片で阿片アルカロイドの注射薬の製造などです。塩化カルシウムを作るのに塩酸が不足してきましたところ、塩酸を作れと司薬(薬剤師ではありません)から言われ、食塩を電気分解して作ることにしましたがクロール水はできても塩酸はできませんでした。触媒が悪いのではないかと文献を探しますが本を持っている人がなく、色々研究中人民解放軍が蒋介石の軍隊を攻撃するため移動することになりましたので恥をかかずにすみしました。埠新へ移動した後、昭和24年4月11日転勤命令が出て瀋陽へ転勤になりました。瀋陽での勤務先は中国医科大学(旧満州医科大学の跡)公衆衛生学院でした。そこに安部三史先生(帰国後北海道大学の衛生学教授で医学部長、東日本学園大学長等)が主任教授として居られ、先生が私を指名されたのでした。安部先生とは解放軍の病院で一緒に仕事をしていたことがあり、その当時そんなに偉い先生だとは知りませんでした。先生は細菌等

の検査をしておられました。先生に何故私を指名されたのかを尋ねたところ「病院の時、自殺者の胃の内容物の検査を依頼した時の態度が良かったからだ。化学のことは全部任せる」と言われました。衛生化学の全般の試験、高粱米の消化と吸収の研究等々、この時ほど熊本薬専を卒業して良かったと思ったことはありません。帰国するまで約4年間安部先生の指導のもと仕事が出来ましたことは、私の人生で大変有意義なものでした。昭和28年3月復員帰国後現住地で薬局を開業、その年の10月安部先生が突然来られ、北海道大学へ来ないかと言われました。私は薬専を出て直ぐ兵隊に行き勉強をしていませんのでと辞退しました。先生は中国でしていたようであり、と言われましたが自信がないのでお断りしました。北海道に就職していれば私の人生も180度変わっていたでしょう。一番嫌いな商売の道を選びました。今年で47年にもなります。乱売の時代ちり紙を担ぎながら、これが薬剤師の仕事かと思いました。乱売を乗りきり薬の販売に励み、またその間市議会議員として20年、県薬剤師会副会長、会長として18年、現場を離れても薬剤師の誇りを忘れたことはありません。学校を卒業以来、色々な仕事をしてきましたが、常に私は良き先輩に恵まれ、良き同僚に、良き部下に、良き周囲の人に助けられ今日まで無事過ごしてきました。我々の若いときは、人生50年軍人半額の時代で3倍以上長生きしました。生死の境は紙一重の差です。運が良かったからで、多数の犠牲者のおかげで現在の私があるので

す。
先輩のお陰で分業も進んできました。医薬品を通じて国民の皆様様の健康と保険福祉の為に薬剤師としての余命を送りたいと思っています。

お互いに薬剤師としての道に邁進しましょう。

平成12年8月15日

研究室だより

薬理学研究室

薬理学研究室は、昭和27年に熊本薬学専門学校から熊本大学薬学部への昇格と同時に設立された「薬効学教室」を前身とする教室で、以後、「薬物学教室」、「薬物活性学講座(薬物学研究室)」を経て、平成10年4月に「薬物活性学講座(薬理学研究室)」と改称しました。薬理学を内容とする教室としては我が国の薬学系の大学の中で最も古い歴史を有しており、同門の卒業生は450名、大学院の博士課程6名および修士課程117名の修了生を数え、国公立大学薬学部・医学部教授、製薬会社の重役・研究本部長、病院薬剤部長などとして活躍しておられる方も沢山います。本学の薬理学教育・研究は加来天民教授、加瀬洋年教授を経て宮田健教授が担当してきました。現在のスタッフは教授以下、甲斐広文助教授、磯濱洋一郎助手、客員研究員1名、大学院生は博士後期課程4名、前期課程10名、そして4年次学部生7名の総勢25名です。この中には、韓国、エジプト、フィリピンそして中国からの留学生4名もいて、国際色豊かです。

現在の主な研究テーマは呼吸器系の薬理および細胞生物学に関するものです。転写因子による遺伝子発現調節機構に焦点を当てた気道上皮細胞の分化および癌化に関する研究や、嚢胞性腺腫症を始めとする遺伝性疾患の遺伝子治療に関する基礎研究を分子生物学的な手法を駆使して精力的に行っています。さらに、漢方薬の薬効薬理や東洋医学的な病態生理についても最新の分子生物学的な手法を駆使して分子レベルでの解析を行うことによって、新しい光を与えるべく努力しています。本年、漢方薬に関する研究で、宮田教授は「日本東洋医学会学術賞」を受賞しました。

教育の面では、学部学生に対する薬理学、機能形態学の講義および3年次生の解剖学・薬理学の実習を担当しています。また大学院教育では、平成10年に熊本大学薬学部臨床薬学専攻(独立専攻)の大学院が新設されたのを機に、薬理学研究室は臨床薬学専攻の協力講座として加わり、高度な専門的知識を有する薬剤師の養成にも努力しています。現在は、臨床薬学を専攻する大学院

生が3名所属しています。大学院2年生の病院実習の一環として、漢方薬の臨床および基礎研究のメッカである富山医科薬科大学・和漢薬研究所で約2ヶ月間の研修を行っているのが薬理学研究室の特長です。

研究室のその他の活動としては、毎週月 - 金曜日の朝7時半からセミナーを行っています。セミナーの内容は主に最新の論文紹介ですが、前述のように外国人が多いため英語で発表および討論することも少なくありません。また、夏と冬の研究室旅行も毎年恒例のイベントとして定着しています。これらの旅行や宴会の時に大きくハメを外してしまうのも、薬理学研究室の伝統かも知れません。

同門の同窓会員による活動も活発です。平成3年3月、薬理学会の年会が大阪で開催された折りに平田彰氏(昭52年卒)を始めとする有志の方々のお世話で、同学会参加者および開催地近郊の同門の会員を対象にした懇親会が開かれて以来、毎年恒例となりました。第11回目となる来年も学会期間中に横浜での開催が予定されています。同門の同窓会員の方々には平素から研究室に様々なご支援とご協力を頂いておりますことに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。これからも研究・教育に研究室員一同いっそう努力していく所存です。最後になりましたが、熊本同窓会の益々のご発展をお祈りいたします。

(文責、磯濱洋一郎)

